

## 「電子立国は、なぜ凋落したか」を読んで

友人に進められて西村 吉雄 著作の「電子立国は、なぜ凋落したか」を読みました。著者は長年にわたり「日経エレクトロニクス」編集長を務め、現在はフリーランスの技術ジャーナリストです。

2013年、日本の電子産業の貿易収支は、とうとう赤字になり、同じ2013年の生産金額は約11兆円にまで縮小する。2000年に達成したピーク26兆円の半分以下である。

しかしながら自動車産業は2000年ほぼ同じ規模だったが、現在まで右肩上がり成長している。電子立国とまで讃えられた日本の電子産業が、なぜここまで凋落してしまったのか？著者はこの疑問から出発した。特に凋落が、なぜ他産業ではなく電子産業なのか、他国ではなく日本なのか？

日本の電子産業の衰退振りは目を覆うばかりであり、微力ながら小職も電子業に身をおいた経緯もあり本書を一気に読み終えました。

本書では凋落の原因を多方面から分析しており、特に興味を覚えたのは企業形態における垂直分業と水平分業の流れの中で日本企業が垂直分業にこだわり続けた結果が、強力なEMSメーカーが日本では育たなかったと本書では指摘しています。

また日本の半導体メーカーはファブレス・ファウンドリの分業にごく最近まで背を向け続けたと結果だとし、半導体産業は衰退の一途を辿っていると指摘しています。

日本の電子産業が一番元気であった時代は1970～1985年であり、小職が入社し、コンピューターの開発設計に従事した時期と全く重なります。最後に開発したのはエンジニアリングワークステーションでCPUは自社製(2ndソース)のMIPS, DRAMはもちろん自家製、OSはAT&TのSystem5のUNIXを流用、TCP/IPは3rdパーティソフトを流用、マルチウィンドウ機能は自家製、機械系CADソフト他多くのAPは自家製であり、まさにコテコテの垂直分業製品であった。当時のスタンドアロンが主流のPCに比べマルチウィンドウとインターネット接続及び仮想記憶で遥かに先進的な製品だった記憶がある。その当時水平分業の考えは無いに等しい。

本書では電子産業の凄まじいテクノロジーの進歩に日本企業がついていけなかったことに対する原因分析で、日本の成功体験が災いしたと述べている。

著者の最後のメッセージは「成功は失敗のもと」であり「日本の電子産業の今後は、企業、経営者、そして技術者が自らの成功体験から抜け出せるかどうか、そこにかかっている。あるいはむしろ、成功体験を持っていない若者に全てを託す。それが一番の早道かもしれない」と結んでいる。

団塊世代の小職にとって目から鱗、考えさせられる本でした。

未だ読んでいない皆様には是非お勧めしたい一冊です。



日経 BP 書店 HP より

(M・M)